

編集後記

極めつけの暖冬であった。今春は菜の花も桜もチューリップも一緒に咲いている。その最中に樺も銀杏も柿も一斉に芽吹きだし、スーパーでは熊本産の竹の子が店頭に並んでいる。地球温暖化のひとつの徴候なのかも知れない。

2月に開催されたIPCCの第一作業部会で承認された第4次評価報告書の予測では、世界の平均気温は今世紀末、循環型社会を実現すれば約1.8度、化石燃料に依存する高度経済成長の場合には約4度の上昇が見込まれている。また、温室効果ガスの増加が「人為起源の可能性がかなり高い」ことも確認されている（かなりというのは90%超の確率でとの表現）。もはや2001年に米国が主張した「科学的に不確実」などとはいってられない確かさである。それにも関わらず、4月開催の第二作業部会報告の取りまとめを巡っては大国のエゴが、政治的な力が科学を追いやるうとしている。『不都合な真実』として。

ところで、公職選挙法第100条第4項の規定、すなわち立候補者数が議員定数を超えない場合は無投票とする規定により、この4月の県会議員選挙で筆者の在住する千葉県松戸市（定数7）は、告示の日に早々と全員当選が確定してしまった。どこかの私立大学と同様に「全入」の状況である。選挙権を得て初めての投票となるはずだった新成人の心境はどのようなものであったであろうか。これも『不都合な真実』である。

（2007年4月 古井）